

平成28年度(第67回)芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞:18名 文部科学大臣新人賞:11名】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	こんごう ひきのり 金剛 永謹	能楽師	くらまてんぐ 「鞍馬天狗」ほかの成果
		はしづめ いさお 橋爪 功	俳優	かげきよ 「景清」における演技
	新人賞	うらい けんじ 浦井 健治	俳優	「ヘンリー四世」ほかにおける演技
映画	大臣賞	あんの ひであき 庵野 秀明	映画監督・アニメーション監督	「シン・ゴジラ」の成果
		かたぶち すなお 片渕 須直	アニメーション監督	「この世界の片隅に」の成果
	新人賞	ふかだ こうじ 深田 晃司	映画監督	ふち 「淵に立つ」の成果
音楽	大臣賞	こやま みちえ 小山 美稚恵	ピアニスト	「小山実稚恵の世界」ほかの成果
		みやた まゆみ 宮田 まゆみ	笙奏者	「宮田まゆみ 笙りサイタル」の成果
	新人賞	やまだ かずき 山田 和樹	指揮者	「山田和樹 マーラー・ツィクルス」ほかの成果
舞踊	大臣賞	こんどう りょうへい 近藤 良平	振付家・ダンサー	コンドルズ20周年記念「20th Century Boy」ほかの成果
	新人賞	よねざわ ゆい 米沢 唯	バレエダンサー	「ロメオとジュリエット」ほかの成果
文学	大臣賞	おんだ ゆうこ 恩田 侑布子	俳人	句集「夢洗ひ」の成果
		こじま ゆかり 小島 ゆかり	歌人	歌集「馬上」の成果
	新人賞	ちえ しる 崔 実	作家	「ジニのパズル」の成果
美術	大臣賞	こうのいけともこ 鴻池 朋子	アーティスト	鴻池朋子展「根源的暴力 Vol.2」ほかの成果
		はしもと まさゆき 橋本 真之	鍛金造形家	「果実の中の木もれ陽」公開制作ほかの成果
	新人賞	たね つよし 田根 剛	建築家	「エストニア国立博物館」の成果
放送	大臣賞	くどう かんくろう 宮藤 官九郎	脚本家	「ゆとりですがなにか」の成果
	新人賞	いのうえ つよし 井上 剛	ディレクター	「トットてれび」の成果
大衆芸能	大臣賞	かつら ざこば 桂 ざこば	落語家	「桂ざこば独演会」ほかの成果
		すずき まさゆき 鈴木 雅之	歌手	アルバム「dolce」ほかの成果
	新人賞	ナイツ つちや のぶゆき (土屋 伸之) はなわのぶゆき (塙 宣之)	漫才師	「ナイツ独演会」ほかの成果
芸術振興	大臣賞	えい きせい 衛 紀生	可児市文化創造センター館長	「私のあしながおじさんプロジェクト」ほかの成果
	新人賞	いのこ としゆき 猪子 寿之	チームラボ代表	「人と共に踊る鯉によって描かれる水面のドローイング-Infinity」ほかの成果
評論等	大臣賞	かけはしくみこ 梯 久美子	作家	「狂うひと-『死の棘』の妻・島尾ミホ」の成果
		やまなし としお 山梨 俊夫	美術評論家	「風景画考 世界への交感と侵犯」(全三部)の成果
	新人賞	きのした ちか 木下 千花	京都大学大学院准教授	「溝口健二論 映画の美学と政治学」の成果
メディア芸術	大臣賞	あきもと おさむ 秋本 治	漫画家	「こちら葛飾区亀有公園前派出所」の成果
	新人賞	もうり ゆうこ 毛利 悠子	美術家	個展「Pleated Image」ほかの成果

※敬称略・部門内50音順・受賞者名の下線は女性

平成28年度(第67回)芸術選奨
文部科学大臣賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	金剛 永謹	金剛永謹氏は平成28年、能「鞍馬天狗 白頭(くらまてんぐ はくとう)」上演において、華やかでスケールの大きな演技によって、東本願寺能舞台という歴史的建造物の重厚感に映える壮大な舞台を創り上げた。厚みのある深く豊かな謡と、おほかで優美な輪郭線を持つ所作は、直面物(ひためんもの)、悪尉物(あくじょうもの)のみならず鬘物(かづらもの)においても、気品と風格を備えた高い芸質を見せている。泰然たる姿が一たび動けば躍動感にあふれ、剛胆(ごうたん)かつ優美な下掛(しもがか)り金剛流の能の特質を見事に体現しており、京都という土地が育ててきた能の表現の一つの頂点を極めている。
演劇	橋爪 功	演劇集団円による「景清(かげきよ)」は、近松門左衛門(ちかまつもんざえもん)の「出世景清(しゅっせかげきよ)」を原典に能や歌舞伎、各地に伝わる伝説、ギリシャ悲劇まで援用しながら、平家の武将・平景清(たいらのかげきよ)の波乱万丈の生涯を描き出した。橋爪功氏が全身全霊を込めて、主人公を熱演、スケール大きい演技で、人類の悲劇にまで普遍化してみせた。これまでの舞台や映像では飄々(ひょうひょう)たる印象が強かったが、全く違う役へ果敢に挑戦。更なる飛躍を期待させる。
映画	庵野 秀明	「エヴァンゲリオン」シリーズで世界中のアニメファンを魅了した庵野秀明氏は、「シン・ゴジラ」制作に当たり、「思想を具現化してこそ先達の制作者や過去作品への恩返しである。」と言う。卓越した技術力と精細な造形、大胆な演出、どれをとっても独創的な氏の天賦の才が躍動する。多用な表現は空想特撮映画を再生し、その力量で新しい映像表現の可能性を見事に体現させた芸術性と技術力の融合は圧巻である。
映画	片渕 須直	一般から出資を募り、数年越しに制作された「この世界の片隅に」は興行・批評の両面で大きな成果を上げ、広く話題にもなった。戦中に広島から呉に嫁ぐ「すず」を主人公とする、この史代(ふみよ)の原作漫画の素材を生かしてアニメーションに翻案した片渕須直氏は、緻密な映像・音響設計で映画ならではの深い感動を観客に体験させる。すずや家族の慎ましい生活の細部、そして、時間的、空間的な距離感がリアルに迫る。戦争を知らない世代が戦争の恐怖とともに、世界の片隅にある何気ない日常の大切さ、そして希望までを観(み)る者に静かに感じさせる。
音楽	小山 実稚恵	小山実稚恵氏は、我が国を代表するピアニストの一人として、永年、第一線で活躍を続けてきた。中でも「小山実稚恵の世界」と題された12年・全24回にわたるリサイタルシリーズでは、古典から近現代作品まで、多様なレパートリーに体系的に取り組んでいる。そのプロジェクトにおいて佳境を迎えた平成28年、これまでの集大成とも言える大きな成果を上げた。また、オーケストラとの共演、室内楽など、幅広い分野での充実した活動も高く評価された。
音楽	宮田 まゆみ	宮田まゆみ氏は、国内外において、笙(しょう)の魅力と可能性を広げる活動を展開している。平成28年の「笙リサイタル 甦(よみがえ)る古譜と現代に生きる笙シリーズⅢ」では、その第1回公演において、笙を用いる現代音楽の代表作と新作を披露し、第2回公演では、音楽学者遠藤徹(えんどうと)氏の監修の下、研究的な視点を盛り込んで、近衛家(このえけ)・陽明文庫所蔵の古譜に基づく「調子」の全曲演奏を行った。そのどちらにおいても精緻な表現力が際立ち、時代やジャンルを超えて飛翔(ひしょう)する笙の魅力を最大限に引き出した。

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	近藤 良平	近藤良平氏及び氏の主宰するコンドルズの活躍は、舞台のみならず、テレビ、映画など多領域にわたるが、コンドルズ結成から20周年を迎えた平成28年、全国10か所で上演した「20th Century Boy」は、ダンス、生演奏、人形劇、映像等多様な表現を融合した独自の世界感の到達点として大きな成果を収めた。コンテンポラリーダンスの概念を拡張する挑戦的なクリエイション、ダンスを通じた社会への貢献や次世代育成等、広さと高さを兼ね備えた氏の活動は高く評価される。
文学	恩田 侑布子	恩田侑布子氏は、これまでに師事する人もなく、しかも着実に俳句の表現領域を切り開いてきた。豊かな感性に恵まれつつも、それを統御する思索の裏付けがある。「くろかみのうねりをひろふかるたかな」「酢牡蠣(がき)吸ふ天の沼矛(ぬぼこ)のひとしづく」「わが視野の外から外へ冬かもめ」など、自在さと多彩さを見せながら、読者との安易な妥協を拒否する、どこか孤独な佇(たたず)まいを感じさせる。現代俳句における特筆すべき書き手である。
文学	小島 ゆかり	既に長いキャリアを持つ小島ゆかり氏の歌集「馬上」は、日常の細々(こまごま)とした些事(さじ)から大きな自然との交感まで、多種多様な題材を伸びやかな声調に乗せて歌い上げている。家族の介護や知己の死など、暗い色調に染められがちな事柄でも、歌の調べは飽くまで穏やかで生き生きとした明るさを失わず、生を、そして世界を率直に肯定している。秋風に吹かれる「馬上の人」の背景に美しい「大夕焼け」の空が広がる。空の広い詩心を持つ歌人の、豊饒(ほうじょう)な一達成である。
美術	鴻池 朋子	鴻池朋子氏は、これまで神話や超自然的な物語を彷彿(ほうふつ)とさせる幻想的な世界観を、多彩な表現で紡ぎ出し、国内外で高い評価を得てきた。群馬県立近代美術館で開催された個展では、震災を契機に変化した人間と自然との関わり方についての人間の意識を敏感に感じ取り、自然に背く行為でありながら、人間はなぜ、「もの」を創るのかという芸術の根源的な意義について、作品を通じて問い掛けた。これまでの芸術活動の在り方を再構築することによって生み出された作品群は、原初的な魅力を放つとともに芸術の新たな可能性を提示した。
美術	橋本 真之	球状と円筒状形態の不規則な連続が膨張し拡大していく限りなく力強い金属造形。これが、橋本真之氏が約40年以上追求してきた形である。平成28年の公開制作(埼玉県立近代美術館)はその創作を新たな高みに押し上げるものであった。たたけば延びる素材の本性と作家の形の意識の融合として造形を捉える、工芸的な造形の本質をこれほど徹底して追求した例はない。それはまた現代美術と工芸を融合する新たな造形の誕生でもある。
放送	宮藤 官九郎	宮藤官九郎氏は常にドラマに新風を吹き込んできたが、平成28年「ゆとりですがなにか」により社会派群像ドラマという新境地を開いた。氏は、「野心がない、競争意識がない、協調性がない」と言われるゆとり世代の若者たち一人一人の悩みや変容の過程を、リアルな台詞(せりふ)と連続ドラマならではの巧みな構成により生き生きと描出した。若者の多様な生き方を痛みとともに豊かに提示することで、世代を超えて多くの視聴者の心に響いた脚本は、氏の稀有(けう)な才能を示している。

部門	受賞者名	贈賞理由
大衆芸能	桂 ざこば	上方落語の四天王と呼ばれた人たちが亡き後、上方落語界で圧倒的な存在感と実績を持つ桂ざこば氏。米朝(べいちょう)流の巧みさと枝雀(しじゃく)流の爆笑を併せ持つ芸風で独演会を各地で行い、時には登場人物の心根に感動して高座で泣いてしまうこともある感情に正直な落語パフォーマンスは多くの人たちに愛され、高く評価されている。平成28年も数多くの独演会を開催したが、特にピッコロシアターでの「崇徳院(すとくいん)」と「強情」では巧みなストーリー展開の合間に大師匠らしからぬお茶目さでくすぐりを連発。落語の楽しさを見事に演じ切り、客席をうならせた。
大衆芸能	鈴木 雅之	海外の最新サウンドに日本ならではの情緒を重ねながら名曲を生み出してきた日本の歌謡ポップス界に、アメリカのR&B音楽が受け入れられる素地を作り、歌謡ソウルともいべきジャンルを広め、今なお最前線を担い続ける存在が鈴木雅之氏である。圧倒的な歌唱力、そしてシングル・アルバムのセールスが1300万枚を超える実績を有する氏は、ソロ活動30周年を迎えた平成28年、記念アルバム「dolce」を発売するとともに、全国22か所でコンサートを開催。豊かで柔軟な歌心を存分に発揮し、大きな成果を上げた。
芸術振興	衛 紀生	衛紀生氏は、平成20年に可児市文化創造センター館長に就任して以来、「地域社会への貢献」「世界水準の舞台制作」を2本の柱に掲げ、市内の中高生を主催公演に招待し劇場体験する「私のあしながおじさんプロジェクト」を立ち上げた。平成28年は、親子と一緒に舞台芸術鑑賞を体験し、親子のコミュニケーションを取り戻す目的を持つ「私のあしながおじさんプロジェクト for Family」が軌道に乗り、大きな成果を上げた。そのほか、「まち元気プロジェクト」など、地域の文化資本や資源を活用して、継続的に地域社会の活性化を図っている。正に全国の劇場・音楽堂の範となる「社会包摂活動」の先駆者である。
評論等	梯 久美子	戦後文学の傑作として知られる島尾敏雄の「死の棘(とげ)」は、分厚い伝説に包まれてきたが、その誕生の現場は多くの謎を秘めている。梯久美子氏は、残された膨大な資料を丹念に読み込み、関わりの深い場所を訪ね、関係者からの証言を聞き取り、テキストの襞(ひだ)深くに踏み迷いながら、新たな読みの地平を切り開いた。読者はきっと、様々な伝説が根底から解体されてゆく現場に立ち会うことになる。それは息を飲むほどに過酷な、しかし豊饒(ほうじょう)なる読書体験であるに違いない。「死の棘(とげ)」が孕(はら)んでいる「書くこと」をめぐる宿業の結ばれに、ひたすら眼(め)を凝らし続ける氏の作家としての覚悟に対して、心からの敬意を表したい。
評論等	山梨 俊夫	全三部から成る「風景画考 世界への交感と侵犯」は古今東西の風景画を独りで論じるという大胆不敵な企てである。美術史学は美術作品を厳密に論じようとして細分化した。山梨俊夫氏の真骨頂は、長く美術館学芸員として、美術作品を公共空間に展示し、それを人々に見せ、自らもまた見る立場に身を置き続けてきたことだろう。そこでは、古今東西の美術といえども全てが現在のものにほかならず、氏はそれらと向き合い、思考し、分かりやすい文章で考えたことを伝える。どのページを開いても、絵を見ることの楽しさ、奥深さを教えてくれる。
メディア芸術	秋本 治	秋本治氏は、広く知られたマンガ作品「こちら葛飾区亀有公園前派出所」の作者である。このマンガは、40年にわたって「週刊少年ジャンプ」誌に一度の休載もなく連載され、コミックス単行本が200巻に達した驚異的作品である。ギャグマンガとしての面白さはもちろん、アクションの醍醐味(だいごみ)や人情の機微を表現する豊かな物語世界、コマ割り等表現面への実験的チャレンジ、さらに時々の話題に関する情報提供や地域活性化のツールとしての役割等々、多面的な魅力・意義を具(そな)える。比類のない仕事であり、これにより文化アイテムとしてのマンガの意義・価値を高め広めた氏の功績は、極めて大きい。

平成28年度(第67回)芸術選奨
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	浦井 健治	浦井健治氏はミュージカル、ストレートプレイで魅力を放つ若手俳優である。「ヘンリー四世」でハル王子を演じ、放蕩(ほうとう)を経て王へと成長する姿を魅力的に演じた。「あわれ彼女は娼婦(しょうふ)」では妹との恋に悩む兄をピュアに演じ、ミュージカル「王家の紋章」では権力者の王が少女との出会いで変わる姿が鮮明。「アルカディア」では無邪気な変人ヴァレンタインを奔放に演じた。タイプの全く異なる4作品で、俳優としての進化を強く印象付けた。
映画	深田 晃司	深田晃司氏はバルザックやE・ロメールといったフランス芸術の影響を自らの血肉とし、現代の日本映画に貴重な奥行きと広がりをもたらしている。初期長編「ざくろ屋敷」で早くも批評家の注目を浴び、「歓待」、「ほとりの朔子(さくこ)」、「さようなら」と意欲作の発表が続く。平成28年の「淵(ふち)に立つ」はカンヌ映画祭で受賞を果たし、日本固有の家族ドラマに西欧的精神性を交えた物語世界が国際的な評価を獲得した。日本映画の未来を担う逸材である。
音楽	山田 和樹	山田和樹氏は、充実した活動を国際的に展開する指揮者である。自ら立案した意欲的な企画を文字どおり先頭に立って実現する類まれなる力には、平成28年、殊に目を見張るべきものがあった。正指揮者を務める日本フィルハーモニー交響楽団とのマーラーと武満徹(たけみつとおる)を組み合わせた演奏会はその顕著な例である。さらに、柴田南雄(しばたみなお)作品の演奏会、あるいはバーミンガム市響交響楽団来日公演などをはじめとする内外の楽団への客演など、いずれも、その才能の輝きを改めて実感させる成果だった。
舞踊	米沢 唯	米沢唯氏は、これまで高度な舞踊技術と軽快な音楽性の際立つダンサーとして評価されていた。平成28年はそれに加え、演技力の格段の深まりを示した。特に、所属する新国立劇場バレエ団の「ロメオとジュリエット」では、初役にもかかわらず、ヒロインの情熱や愛と死を通じての内面的成長、物語の悲劇的テーマを繊細に描いた。他の出演作品の全てにおいても主役にふさわしい力量を示し、更なる飛躍を期待させる。
文学	崔 実	「ジニのパズル」は強い小説である。心に響く強度を測る計測器があるとしたら、針は振り切れるかもしれない。純な心を持つたくましい少女—東京、ハワイ州、オレゴン州と学校をたらい回しにされた在日韓国人ジニ—が主人公である。逃げ場のない過去を背負う少女のたった独りの闘いはダイナミックで、世界各地で起きている民族間の争いや差別などが顕在化している昨今、正に時機を得た好著と言えよう。文学の力を信じさせる新人の誕生である。
美術	田根 剛	田根剛氏は平成18年に「エストニア国立博物館」の設計競技において、弱冠26歳で最優秀賞を獲得し、様々な困難を乗り越えてこの建築を同28年完成させた。ソヴィエト連邦時代の負の遺産である軍用滑走路をそのままモチーフに取り込んだ建築は、シャープでインパクトのある造形により、「過去の記憶の継承」だけでなく、エストニアの「未来への飛翔(ひしょう)」を予感させる優れたものである。この建築の完成により、現在世界で最も注目されている若手建築家の一人となっている。

部門	受賞者名	贈賞理由
放送	井上 剛	井上剛氏はテレビドラマの演出家として「あまちゃん」をヒットさせ、緊迫感あふれる異色の刑事ドラマ「64(ロクヨン)」を手掛ける一方、「その街のこども」と「LIVE! LOVE! SING! 生きて愛して歌うこと」では、二つの大震災をドキュメンタリー・タッチで取り上げた。一作ごとに新たなジャンルや題材に挑み続け、平成28年の「トットてれび」ではテレビ草創期の群像劇と熱気を見事に再現した。ここ数年の活躍は目覚ましい。
大衆芸能	ナイツ (土屋 伸之) (塙 宣之)	内海桂子(うつみけいこ)氏の薫陶を受け、東京漫才期待の若手として登場したナイツ。大手検索サイトをネタにした「ヤホーで調べました」で一躍人気者となり、奇をてらうことなく、高齢者から子供まで見事に笑いの渦に引き込んできた。平成28年に行った初めての全国ツアーでは、当日限定のネタも披露。師匠の助言による「ネクタイにスーツ姿」は崩さない一方で、ネタ作りを怠らず舞台に出続けることが、漫才師としての力を伸ばし続けている。話芸の力でトップを走り続ける二人には更なる飛躍が期待される。
芸術振興	猪子 寿之	猪子寿之氏が代表を務めるチームラボの活動は美の概念を拡張させ、新たな感覚の世界を創出している。デジタルテクノロジーによって物質の媒介から解放された作品の境界は曖昧(あいまい)になる。このような思考の中で開発された、「teamLab: Dance! Art Exhibition, Learn & Play! Future Park」は世界各地で開催され、多くの観客を集めた。平成28年には、シンガポールに「FUTURE WORLD: WHERE ART MEETS SCIENCE」がオープンし、常設展示された。氏らの創作活動は、現実社会にあらざるをえない物質によって仕切られてしまっている境界を透かしていくことにより、多くの社会問題さえも解決していくのではないかと期待される。
評論等	木下 千花	映画監督・溝口健二は、日本のみならず世界に知られた映画作家であり、これまで数多くの作家論や作品論、評伝などが執筆されてきた。木下千花氏は、そうした従来の研究や評論の蓄積を逐一精査しながら、映画史、美学、政治学、テキスト論、ジェンダー論など多角的な視点を交差させて考察することで、溝口健二の映画における「現代映画」としての新たな相貌を浮き彫りにする。その複数の視座から捉えた精彩に富んだ論考は、「映画とは何か」という問いかけを促すと同時に、日本映画史の再検証にもつながる刺激的な試みである。
メディア芸術	毛利 悠子	毛利悠子氏は平成28年を通して、東京での個展「Pleated Image」を筆頭に、台北、ニューヨークでの個展、さらに、8つのグループ展への招聘(へい)参加など、卓越した活動を見せた。メディアアートを背景とする技術への理解を、制作の文脈や置かれる場所の特性を生かしたインスタレーションへと展開する能力は、領域横断的な音楽作品とも、楽器作品とも、彫刻とも、更にはインタラクティブ作品とも解釈することの可能な、氏独自の世界となっている。また、氏自身の天性のコミュニケーション能力は、大きな展開につながる可能性があり、これからの日本人アーティスト像を先取りするものである。

平成28年度(第67回)芸術選奨
選考経過

平成28年度(第67回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	<p>演劇部門では、選考審査員、推薦委員から、文部科学大臣賞候補に11名、文部科学大臣新人賞候補に14名の推薦があった。劇作家、演出家、俳優の推薦が多数であるが、今年度は制作者、舞台美術家が入ったのが特徴的といえる。第一次選考審査会では活発な議論が交わされ、文部科学大臣賞は伝統芸能1名を含む4名、文部科学大臣新人賞は伝統芸能1名を含む6名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、候補者の業績について様々な角度から白熱した議論が重ねられた。まず、スケールが大きく華やかな表現で能楽界を牽引(けんいん)する能楽シテ方の金剛永謹氏が評価された。次に俳優の二人に絞り込まれ活発な議論が交わされ、俳優人生の集大成というべき迫真の演技が評価された橋爪功氏が選ばれた。文部科学大臣新人賞は、その実績と将来性をどのように評価するかの討議となり2名の候補に絞り込まれた。そしてミュージカルだけではなくシェイクスピア作品等の演技で飛躍を遂げた浦井健治氏が選出された。</p>
映画	<p>映画部門では、選考審査員、推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として10名、文部科学大臣新人賞候補者として13名の推薦があった。第一次選考審査会では、各賞共に全ての候補者について、それぞれの選考審査員が推薦する候補者の業績、推薦理由について述べ、推薦委員の候補者についても、その業績、推薦理由を確認した。それを基に、選考審査員によって白熱した議論が繰り広げられた結果、文部科学大臣賞6名、文部科学大臣新人賞6名の候補者に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、候補者の業績について、様々な角度から、更に慎重かつ精細な議論が重ねられ、文部科学大臣賞には、綿密な取材と丁寧な作画で日本映画史に残る傑作を生み出したアニメーション映画「この世界の片隅に」の監督片淵須直氏と、「ゴジラ」を全く新しい発想で映像化し日本中を熱狂させた「シン・ゴジラ」の庵野秀明氏を選出した。文部科学大臣新人賞には、カンヌ国際映画祭等で受賞し、世界から注目される「淵(ふち)に立つ」の監督深田晃司氏を選出した。</p>
音楽	<p>音楽部門では、文部科学大臣賞候補者として11名(うち選考審査員から8名、推薦委員から3名)、また文部科学大臣新人賞候補者として12名(選考審査員から6名、推薦委員から6名)が推薦された。第一次選考審査会は、全ての候補者について入念な検討を重ね、その結果、文部科学大臣賞候補者を5名に、また、文部科学大臣新人賞候補者を3名に絞り込んだ。第一次選考審査会は、かなり深い論議が重ねられた。</p> <p>第二次選考審査会では、まず文部科学大臣賞候補者5名の業績について改めて精査した。それを踏まえて活発な議論を重ねた結果、ピアニストの小山実稚恵氏(「小山実稚恵の世界」ほかの成果による)、及び笙(しょう)奏者の宮田まゆみ氏(「宮田まゆみ 笙(しょう)リサイタル」の成果による)を、文部科学大臣賞に選定した。引き続き文部科学大臣新人賞候補者3名の業績について検討した結果、指揮者の山田和樹氏(「山田和樹 マーラー・ツィクルス」ほかの成果による)を文部科学大臣新人賞に選定した。</p>
舞踊	<p>舞踊部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補として15名、文部科学大臣新人賞候補として13名が挙げられた。第一次選考審査会では、全ての候補について、その推薦理由を検討。文部科学大臣賞候補、文部科学大臣新人賞候補の重複もあり、議論を進めて、第二次選考審査会の対象として、文部科学大臣賞候補5名、文部科学大臣新人賞候補5名に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、第一次選考審査会を踏まえて、選考審査員が順次、文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞について改めて推薦する候補者についてその理由を述べた。文部科学大臣賞では振付家・コンテンポラリーダンサーの近藤良平氏を推す選考審査員が多かった。もう一人について議論を進める中で、文部科学大臣新人賞候補について絞り込む必要があり、議論の結果、バレエダンサーの米沢唯氏を推す選考審査員が多かった。改めて文部科学大臣賞候補のもう一人について検討したが、ジャンルのバランス、将来性なども考慮していくと、今回は見送ることが適当であるとの意見で一致した。その結果、文部科学大臣賞には近藤良平氏、文部科学大臣新人賞には米沢唯氏を選出した。</p>

平成28年度(第67回)芸術選奨 選考経過一覽

部門	選考経過
文学	<p>文学部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞の候補として16名、文部科学大臣新人賞の候補として14名が挙げられた。第一次選考審査会では、慎重な議論の末、文部科学大臣賞は7名(小説家4名、ノンフィクション作家1名、歌人1名、俳人1名)に、文部科学大臣新人賞は5名(小説家4名、歌人1名)に絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、第一次選考審査会での議論を踏まえ、候補者全員のこれまでの業績や平成28年中の成果について、更なる検討が行われた。その結果、文部科学大臣賞には、老父、老母を次々に介護することになる女性の日常の哀歓を歌った歌集「馬上」の作者小島ゆかり氏と、尖鋭(せんえい)な言語実験を展開する句集「夢洗ひ」の作者恩田侑布子氏の2名を選定した。文部科学大臣新人賞には、これも慎重な議論の末、在日韓国人中学生の、日本学校、朝鮮学校、さらに、いずれにもなじめずに転校したアメリカの学校における体験に取材した、いわば居場所のない少女の心を描いた小説「ジニのパズル」の作者崔実氏を選定した。</p>
美術	<p>美術部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞の候補者18名、文部科学大臣新人賞の候補者14名が推薦された。第一次選考審査会では、選考審査員から推薦された候補者については推薦した選考審査員が、推薦委員から推薦された候補者については専門領域を同じくする選考審査員が、これまでの業績と推薦の理由を説明し選考に入った。その結果、第二次選考審査会の対象として文部科学大臣賞候補6名、文部科学大臣新人賞候補4名に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、推薦した選考審査員から新たに説明が加えられるとともに、他の選考審査員からも意見が述べられ、更に議論が深められた。ただ、美術部門も分野が多岐にわたっており、文部科学大臣賞の選考では意見が分かれた。討論の末、群馬県立近代美術館で個展「根源的暴力 Vol.2」を開催し、従来の日本画の枠を乗り越え、芸術活動の根源そのものに迫った鴻池朋子氏、鍛金造形家として長年活動し、埼玉県立近代美術館の屋外で「果実の中の木もれ陽(び)」と題して公開制作を行った橋本真之氏の2名が選ばれた。また、文部科学大臣新人賞では設計したエストニア国立博物館が平成28年完成し、世界的な評価を得た田根剛氏が多数の支持を得て選ばれた。</p>
放送	<p>放送部門では、文部科学大臣賞14名、文部科学大臣新人賞12名が推薦された。選考審査員は各候補者を推薦する契機となった作品を中心に、過去の作品も参考としながら意見を提示しあつた。急速に変化している現代をどう表現できるのかについての議論が弾んだ。</p> <p>その結果、第一次選考審査会では文部科学大臣賞候補を6名、文部科学大臣新人賞候補を7名に絞り込み、第二次選考審査会において文部科学大臣賞に宮藤官九郎氏、文部科学大臣新人賞に井上剛氏が選ばれた。両氏とも時代の様相を敏感に捉えたテーマ設定、表現技法が独創性に富み、新しい感覚を伝えるドラマ作家として評価された。</p> <p>文部科学大臣賞の宮藤氏はドラマ「ゆとりですがなにか」で、教育、就活、結婚、親子、家庭などの現代世相を新鮮な世代の言葉、行動として脚本に描き、俳優を見事に誘導した。文部科学大臣新人賞の井上氏は「トットてれび」の演出に当たり、過去の経験とは異種の演出スタイルでジャンルにとらわれない手法を奔放に導入し、テレビドラマの自由なスタイルを感じさせる挑戦を試みた。時代の変化に対し柔軟な創造の可能性を示し、未来を感じさせる2氏の選考となった。</p>
大衆芸能	<p>大衆芸能部門は、範囲が幅広く、選考審査員の意見がまとまるまでの過程は、例年たやすいことではない。だが今回は、選考審査員が自分の思いを率直にぶつけ合い、充実した議論を行ったおかげで、いずれも多数決を取るまでもなく全選考審査員が納得した上で受賞者を選出することができた。</p> <p>第一次選考審査会は、文部科学大臣賞候補13名(落語家7名、歌手2名、浪曲師、物まね、クウン、講談師各1名)を6名に、文部科学大臣新人賞候補11組(落語家6名、漫才師2組、コント1組、浪曲師、歌手各1名)を2組に絞った。</p> <p>第二次選考審査会では、まず、「四天王」を失った上方落語界で、圧倒的な存在感を持つ桂ざこば氏の高座の充実ぶりを推す意見が東西地区の選考審査員から寄せられ、文部科学大臣賞に選出した。さらに、ソロ活動開始30周年を迎えた鈴木雅之氏の「大人を酔わせる」歌を評価し、文部科学大臣賞に選出した。文部科学大臣新人賞には、東京漫才を文字どおり牽引(けんいん)するナイツを異論なく選出した。ネタ作りを怠らず、幅広い世代に好感を持たれている点も評価された。</p>

平成28年度(第67回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
芸術振興	<p>芸術振興部門では、「新たな芸術分野の創造、普及などの貢献のある者」や「複数の部門にわたっての活動を行い、斯界(しかい)に影響を与えている者」、また、「他部門に該当しない文化活動を行っており、その活動が国内外で広く認知・評価を得ているもの」が対象となっているが、今年度も、文部科学大臣賞候補に11名、文部科学大臣新人賞候補に5名が推挙された。第一次選考審査会では、推薦書や活動資料を基に各選考審査員から推薦意見があり、検討した結果、文部科学大臣賞候補を4名、文部科学大臣新人賞候補を3名に絞った。</p> <p>第二次選考審査会では、各候補者について選考審査員の追加調査報告も踏まえて、慎重に検討を重ねた結果、文部科学大臣賞には「私のあしながおじさんプロジェクト」ほかの成果で、可児市文化創造センター館長の衛紀生氏を、文部科学大臣新人賞には「人と共に踊る鯉(こい)によって描かれる水面のドローイング—Infinity」ほかの成果で猪子寿之氏を選出した。</p>
評論等	<p>評論等部門では、第一次選考審査会において、まず文部科学大臣賞の候補者22名を6名に絞り込んだ。分野別の内訳は、映画・音楽・文学・演劇各1名、美術2名である。文部科学大臣新人賞については、16名の候補者から5名を残し、文部科学大臣賞候補の1名を文部科学大臣新人賞候補として審議することにした。分野は文学2名、音楽・建築・映画・メディア芸術各1名である。</p> <p>第二次選考審査会では、文部科学大臣賞候補者の6名全てを受賞可能性があるものと見なして議論を始めた。しかし選考はおのずと、精緻にして愛情あふれる「狂うひと—『死の棘(とげ)』の妻・島尾ミホ」を執筆した作家梯久美子氏と、古今東西の広範な作例を詳細に考察した「風景画考 世界への交感と侵犯」を執筆した山梨俊夫氏へと収斂(しゅうれん)していった。文部科学大臣新人賞の審査では、6名のうち3名を最終議論の対象としたが、木下千花氏の「溝口健二論 映画の美学と政治学」が一頭地(いっとうち)を抜く清新な力作という評価を得て、異論なく選出された。三作いずれもが、貴重な情報を豊かに盛り込んだ渾身(こんしん)の大著である。</p>
メディア芸術	<p>メディア芸術部門では、漫画、アニメーション、エンターテインメントデザイン、そしてメディアアートといった多岐にわたる芸術分野の中から候補者が挙げられ審査が行われたが、選考審査員の中でメディア芸術部門の意義と領域の多様性について例年にも増した白熱した議論が行われた。選考対象候補として選考審査員と推薦委員から、文部科学大臣賞候補として9名、文部科学大臣新人賞候補として8名の推薦があった。第一次選考審査会において、それぞれの領域を代表する候補者に絞られ、第二次選考審査会に残った候補者は文部科学大臣賞4名、文部科学大臣新人賞4名である。</p> <p>第二次選考審査会において、平成28年の活躍や注目度、文化全般への影響度、継続的な業績などを総合的に考慮し、審査を行った。その結果、文部科学大臣賞は、連載期が40年に及び、コミックス200巻発刊を達成、漫画表現の追求だけでなく、東京の下町文化や機微を後世に向けて刻印した「こちら葛飾区亀有公園前派出所」の成果によって、秋本治氏に贈られることになった。文部科学大臣新人賞には、一貫したコンセプトを自由な感性表現と多彩なアウトプットによって展開し、個展「Pleated Image」ほかで活躍が注目された毛利悠子氏が選ばれた。</p>

芸術選奨実施要項

昭和45年 5月13日
文化庁長官裁定
一部改正 平成11年 5月13日
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年 12月26日
一部改正 平成24年 4月 1日

1 趣 旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞または芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

2 部 門

- (1) 演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家，演出家，演技者，舞台美術家等）
- (2) 映画（劇映画・記録映画等の演出家，脚本家，撮影者，演技者等）
- (3) 音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家，指揮者，作曲家，演出家，舞台美術家等）
- (4) 舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家，演出振付家，舞台美術家等）
- (5) 文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家，翻訳家等）
- (6) 美術（絵画・彫刻・工芸・書・写真・デザイン・建築等の作家）
- (7) 放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家，演出家，演技者等）
- (8) 大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショー・ポピュラーミュージック等の作家，作曲家，演出家，演技者等）
- (9) 芸術振興（新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者）
- (10) 評論等（芸術評論家，文化芸術活動に著しい貢献のあった者）
- (11) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたアート作品やエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）

3 賞の対象

- (1) 賞は，文部科学大臣賞状及び賞金とする。
- (2) 芸術選奨文部科学大臣賞は，特に優れた業績をあげた芸術家（個人）を対象とするもので，各部門2名以内（ただし，放送部門，芸術振興部門，メディア芸術部門は1名以内）を原則とする。
- (3) 芸術選奨文部科学大臣新人賞は，新人の芸術家（個人）を対象とするもので，各部門1名以内を原則とする。
- (4) 過去に受賞したものは同一部門の同種の賞については，原則として対象としない。

4 選考の時期及び選考の基準

- (1) 選考は，毎年，原則として1月中に行うものとし，選考の対象となる業績は，主として前年の1月から前年の12月までの間にあげられたものとする。
- (2) 選考に際しては，これまでの業績に加え，将来性，年齢，他の受賞歴等も勘案して選出する。

5 選考方法

- (1) 各部門ごとに芸術に関し識見を有する者の協力を得てその審査を行い，受賞者を決定する。
- (2) 前項の審査のため，各部門ごとに選考審査会を設置する。
- (3) 各部門ごとに推薦委員を設け，選考審査会に候補者を推薦する（評論等部門，芸術振興部門を除く）。
- (4) 選考審査員及び推薦委員は当該部門の実演家，専門家及び学識経験者の中から文化庁長官が委嘱する。

芸術選奨実施細則

平成11年 5月13日
文化庁次長決裁
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年12月26日
一部改正 平成24年 4月 1日

1 選考実績

実施要項4(2)の選考にあたっては、下記のことに留意する。

- (1) 日本芸術院会員、重要無形文化財(各個認定)保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者等すでに国の栄典を受けている者については授賞対象としない。
- (2) 物故者は対象としない。
- (3) 受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は70歳未満、新人賞は50歳未満とする。
- (4) 受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

2 選考方法

- (1) 選考にあたっては、各部門の選考審査員及び推薦委員が、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができる。ただし、評論等部門及び芸術振興部門については、他部門の選考審査員及び推薦委員からも、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができるものとする。
- (2) 芸術振興部門における「新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次のような者をいう。
 - ① 新たな芸術分野を創造、または普及させるなど著しい貢献のある者
 - ② 複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者
 - ③ 他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

3 実施要項3(3)に定める「新人の芸術家」は次のものをいう。

- (1) 活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
- (2) 今後活躍が大いに期待されること。

平成28年度(第67回)芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】		【放送部門】	
おおしま ひでお 大島 秀夫	日本芸術文化振興会プログラムオフィサー	いしい あきら 石井 彰	放送作家
おおたに せつこ 大谷 節子	成城大学教授	おかむら みなこ 岡室 美奈子	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長、早稲田大学文学学術院教授
かめおか のりこ 亀岡 典子	産経新聞大阪本社文化部編集委員	こうたけ てつや 上滝 徹也	評論家、日本大学名誉教授
たかはし ゆたか 高橋 豊	演劇評論家、毎日新聞社客員編集委員	しげのぶ ゆたか 重延 浩	(株)テレビマンユニオン会長
たちばな けいこ 立花 恵子	演劇評論家	すずき よしかず 鈴木 嘉一	放送評論家
はやし なおゆき 林 尚之	日刊スポーツ新聞社文化社会部編集委員	たけやま よう 竹山 洋	脚本家
わたなべ ひろし 渡辺 弘	(公財)埼玉県芸術文化振興財団業務執行理事兼事業部長	にしむら よしき 西村 与志木	JCA西村オフィス代表、フリープロデューサー
【映画部門】		【大衆芸能部門】	
あおき しんや 青木 眞弥	キネマ旬報編集部部長、キネマ旬報編集長	いまおか けんたろう 今岡 謙太郎	武蔵野美術大学教授
うだがわ こうよう 宇田川 幸洋	映画評論家	おおとも ひろし 大友 浩	演芸研究者、文筆家
おかじま ひさし 岡島 尚志	東京国立近代美術館フィルムセンター主幹	かみゆま しんべい 上沼 真平	テレビプロデューサー
かわしま 肇まさ 川島 肇正	映画編集者	はぎわら けんた 萩原 健太	音楽評論家
ねがし きちたろう 根岸 吉太郎	映画監督、東北芸術工科大学長	はな いのぶ 花井 伸夫	演劇・演芸評論家
ひらの まよこ 平野 共余子	映画史研究者	ふるかわ あやこ 古川 綾子	国際日本文化研究センター特任助教
やたべ せいし 矢田部 吉彦	東京国際映画祭プログラミング・ディレクター	ゆい まさかず 油井 雅和	毎日新聞記者
【音楽部門】		【芸術振興部門】	
おかくべ しんいちろう 岡部 真一郎	明治学院大学教授	あけち けいこ 明智 恵子	キネマ旬報編集部エグゼクティブ・エディター
おぼた つねお 小畑 恒夫	昭和音楽大学教授	えだがわ あきとし 枝川 明敬	東京藝術大学教授
かのう まり 加納 マリ	武蔵野音楽大学講師	こばやし まり 小林 真理	東京大学教授
たにがいと かずこ 谷垣内 和子	(公社)日本芸能実演家団体協議会 実演芸術振興部・企画室長	きかい 誠 井 誠	日本芸術文化振興会演劇プログラムディレクター、演劇制作アドバイザー
なかむら たかよし 中村 孝義	大阪音楽大学理事長・名誉教授	ちよき せいじ 長木 誠司	東京大学教授
のがわ みほこ 野川 美穂子	東京藝術大学講師	ひびの かつひこ 日比野 克彦	岐阜県美術館長、東京藝術大学美術学部長、アーティスト
みやけ ちかお 三宅 幸夫	慶應義塾大学名誉教授	【評論等部門】	
【舞踊部門】		あかさか のりお 赤坂 憲雄	学習院大学教授
うみの びん 海野 敏	東洋大学教授	いそやま たし 磯山 雅	国立音楽大学招聘教授、大阪音楽大学客員教授
おの しんじ 小野 晋司	(公財)横浜市芸術文化振興財団チーフプロデューサー、横浜赤レンガ倉庫1号館館長	かわむら みなと 川村 湊	法政大学国際文化学部教授
ながの ゆき 長野 由紀	舞踊評論家	きのした なおゆき 木下 直之	東京大学教授
ひらの ひでとし 平野 英俊	舞踊評論家	すずき としこ 鈴木 杜幾子	明治学院大学名誉教授
ほんだ じつお 本多 実男	(公社)日本バレエ協会理事	むらやま きょういちろう 村山 匡一郎	日本大学芸術学部教授
まるも みえこ 丸茂 美恵子	日本大学教授	【メディア芸術部門】	
みやつじ まさお 宮辻 政夫	演劇評論家	あべ かずお 阿部 一直	山口情報芸術センター副館長
【文学部門】		いわたに たける 岩谷 徹	東京工芸大学教授
おごき まりこ 尾崎 真理子	読売新聞編集委員	こばやし かずえ 木幡 和枝	アートプロデューサー、東京藝術大学名誉教授
さわ こうま 澤 好摩	俳人	さきもと じゅん 笹本 純	筑波大学名誉教授
しまだ まさひこ 島田 雅彦	作家、法政大学国際文学部教授	じんのうち としひろ 陣内 利博	武蔵野美術大学教授
すずき ふみこ 鈴木 文彦	八重洲ブックセンター元顧問	ふじはた まさき 藤幡 正樹	メディアアーティスト
ながた かずひろ 永田 和宏	京都産業大学総合生命科学部教授、京都産業大学タンパク質動態研究所所長	みなもと たろう みなもと 太郎	漫画家、マンガ研究家
まつら ひさき 松浦 寿輝	作家、詩人		
みうら まさし 三浦 雅士	文芸評論家		
【美術部門】		【部門内五十音順】	
いとう まさのぶ 伊東 正伸	国際交流基金文化事業部長・審議役		
えんどう あきこ 遠藤 彰子	武蔵野美術大学教授		
おごき しょう 尾崎 正明	茨城県近代美術館館長		
かねこ けんじ 金子 賢治	茨城県陶芸美術館館長		
くりゆう あきら 栗生 明	(株)栗生総合計画事務所代表取締役		
しま けん 島 敦彦	愛知県美術館館長		
すどう れいこ 須藤 玲子	東京造形大学教授		
なごや あきら 名見 明	(公財)五島美術館副館長		
ふくなが おさむ 福永 治	広島市現代美術館館長		
みなみ けんすけ 南 雄介	国立新美術館副館長兼学芸課長		

平成28年度(第67回)芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】		【美術部門】	
あらい 新井 浩介	日本芸術文化振興会プログラムオフィサー、日本児童・青少年演劇協同組合理事	あおき 青木 淳	青木淳建築計画事務所主宰
いのうえ 井上 桂	日本芸術文化振興会プログラムオフィサー	あおき 青木 のぶ	彫刻家
おおた 太田 耕人	京都教育大学副学長	いがらし 五十嵐 まさる	損保ジャパン日本興亜美術館学芸課長
おだしま 小田島 恒志	早稲田大学教授	おおはし 大橋 しゅういち	埼玉大学教授
このの 河野 たかし	文化ジャーナリスト、演劇評論家	おがわ 小川 あつお	多摩美術大学教授
しおさき 塩崎 淳一郎	読売新聞東京本社文化部記者	かとう 加藤 ひろこ	東京都現代美術館管理課調整担当係長
ばんどう 坂東 亜矢子	演劇評論家	くろかわ 黒川 こうじ	佐倉市立美術館学芸員
ひかわ 氷川 まりこ	伝統文化ジャーナリスト	すがわら 菅原 のりお	読売新聞東京本社編集委員
ふるいど 古井戸 秀夫	東京大学教授	なかの 中野 おしゆき	日本画家、多摩美術大学名誉教授
やすざわ 安澤 哲男	世田谷パブリックシアター劇場部長	はしもと 橋本 ゆうこ	宇都宮美術館主任学芸員
【映画部門】		ふくだ 福田 みらん	画家
えりかわ 襟川 クロ	映画パーソナリティ	もり 森 つかさ	アーツカウンシル東京 事業推進室事業調整課長
おおた 大前 かずみ	日本映画テレビ技術協会会長、撮影監督	もり 森 ひとし	金沢美術工芸大学 柳宗理記念デザイン研究所シニア・ディレクター
おがた 尾形 敏朗	映画評論家	もりやま 森山 あきこ	武蔵野美術大学教授
おくむら 奥村 賢	いわき明星大学教養学部教授	やすぎ 安来 まさひろ	国立国際美術館主任研究員
かわむら 川村 健一郎	立命館大学映像学部教授	やまざき 山崎 つよし	金沢美術工芸大学教授
きたこうじ 北小路 たかし	京造形芸術大学准教授	やまもと 山本 かずひろ	栃木県立美術館シニア・キュレーター
こが 古賀 みつた	日本大学芸術学部教授	【放送部門】	
すぎはら 杉原 永純	山口情報芸術センター キュレーター	いりえ 入江 たのし	メディアプロデューサー
なかやま 中山 はるみ	映画ジャーナリスト	しおだ 塩田 純	NHK第一制作センター文化・福祉番組部 エグゼクティブ・プロデューサー
よした 吉田 かおる	大阪大学非常勤講師	たにかわ 谷川 たけし	早稲田大学政治経済学術院客員教授
【音楽部門】		にわ 丹羽 おしゆき	東京大学准教授
いしだ 石田 あきこ	昭和音楽大学教授	はたと 旗本 こうじ	読売新聞東京本社文化部次長
いとう 伊東 のぶひろ	大阪大学大学院教授	はまざき 濱崎 こうじ	川崎市市民ミュージアム学芸員主査
おかだ 岡田 あけ	京都大学教授	ひぐち 樋口 なおみ	映画評論家、映画監督
こがし 小鍛冶 邦隆	東京藝術大学音楽学部作曲科教授	みずた 水田 のぶ	日本テレビ放送網株式会社執行役員、制作局専門局長
こくど 国土 潤一	音楽評論家	みはら 三原 おさむ	放送作家、日本大学芸術学部放送学科非常勤講師
さいとう 齋藤 ひろつぐ	東京文化財研究所客員研究員	わたべ 渡部 めのる	映画評論家
たかばたけ 高田 整子	フリーライター	【大衆芸能部門】	
ちば 千葉 ゆうこ	慶應義塾大学講師	おぎた 荻田 きよ	梅花女子大学名誉教授
のたいら 野平 いちろう	東京藝術大学教授	かとり 香取 よしひこ	洗足学園音楽大学教授
ふじた 藤田 たかのり	京都市立芸術大学教授	かわさき 川崎 ひろし	毎日新聞社学芸部専門編集委員
【舞踊部門】		まきや 関谷 もとこ	音楽評論家
いづか 飯塚 ともし	産経新聞文化部記者	つじ 辻 のりこ	フリーライター
うえの 上野 房子	ダンス評論家	ながい 長井 よしひろ	読売新聞東京本社企画委員
おかみ 岡見 さえ	舞踊評論家、慶応大学非常勤講師	なかむら 中村 まさ	演芸プロデューサー
こが 古賀 しろう	(公社)日本舞踊協会事務局長	ぬのめ 布目 えい	横浜にぎわい座チーフプロデューサー
すずな 松 あつこ	舞踊ジャーナリスト	はた 畑 りつえ	毎日新聞社学芸部専門編集委員
ただの 多々納 みわ子	舞踊家、(公社)日本バレエ協会理事	まえだ 前田 けんじ	寄席芸能史研究家
たちま 立木 燐子	舞踊評論家	【メディア芸術部門】	
のぎき 野崎 ますこ	(株)日本舞踊社代表取締役	いいた 飯田 かずとし	立命館大学映像学部教授
みずおち 水落 ひろ宏	舞踊評論家	いとう 伊藤 ガビン	編集者、クリエイティブディレクター
むらやま 村山 くみこ	舞踊評論家、早稲田大学非常勤講師	こすぎ 小杉 みほ	美術作家
【文学部門】		さそう あきら	漫画家、京都精華大学教授
あんどう 安藤 れいじ	多摩美術大学美術学部准教授	しいな 椎名 ゆかり	翻訳者、東京藝術大学非常勤講師
まど 城戸 朱理	詩人	たかたに 高谷 しろう	アーティスト
くりま 栗木 きょうこ	歌人	てら井 寺井 ひろのり	(株)ピクス クリエイティブディレクター、多摩美術大学特任教授
げんやう 玄侑 宗久	作家、福聚寺住職	どい 土居 のぶみ	(株)ニューディーア代表取締役
さとう 佐藤 ようじろう	作家、日本大学芸術学部教授	はまむら 浜村 ひろみ	カドカワ株式会社取締役
なか 仲 寒蟬	佐久市立国保浅間総合病院地域医療部長	ひかわ 氷川 りゅうすけ	アニメーション特撮研究家、明治大学大学院客員教授
なぐ 南木 佳士	佐久総合病院人間ドック科部長	【部門内五十音順】	
のぎき 野崎 歓	東京大学教授		
やなぎ 柳 のぶひろ	湘南白百合学園中学・高等学校教頭		
わたなべ 渡部 なおみ	早稲田大学文学学術院教授		